

無目的な旅人達

ザワールド

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヒイロ、ガゼル、1柱女神イズノメ様が各地へ旅したり住んだり、全くの明確な目的も無い物語り、思い付いたら打っています。

目次

彼等と1柱の無目的な物語り	1
第2話	6
第3話	9
第4話	12
第5話	15
第6話	18
第7話	21
第8話	23
第9話	27
第10話	30

彼等と1柱の無目的な物語り

オドミオン岬

ここらでは魚が捕れる小さな漁村。

灯台があり船の道標となっているが、航路になっている為、船が来ても他へ移動してしまう。

「お・・・いヒ・・・」

「おーいヒイロ」

「んあ・・・ふあくあ、あれいつの間にか寝てたのか」

さざ波の音でウトウトしていた、気持ちが悪かったのに

俺ことヒイロは漁師の中で1番魚を釣れている、とつても偉い

「ヒイロんなエサすら付いてないんじや何も食いつかないよ」

「・・・確かに釣りをしに来たのにエサ忘れたままで釣り糸流したままだ。」

「忘れてただけだよ！ガゼルはなんか俺に用？」

このガゼルは人のことよく見てる奴で、一々何か言ってくる。

マメなタイプなんだろうな・・・ほつといってもらいたいが、

頭はボサボサだし、かく言う俺もボサボサ、

髪の色は俺が黒で、ガゼルは薄い金色、

体格はどっちもどっち中肉中背で痩せすぎでもなく太ってるわけでもない。

身長も前まで俺の方がほんのちよつと負けてたが、今は俺の方が上だ。

「ヒイロ・・・見栄張るのやめようよ僕は175でヒイロは173だよ」

「なんで俺がナレーションしてるのに普通にセリフ出しちゃうんだよ
〜！」

俺は釣り竿を再度海に釣り糸を流す

「でねヒイロは今暇だと思ってるから一緒に来てよ」

「・・・当たってるがミョーに納得いかない・・・しスルーされてる」

「ごめんごめん、それでさ最近地震が多かったじゃんほとんど小規模だったけど」

「ああ、そう言えば津波もそんなに酷くなかった」

「この岬では過去に何度か大津波が来ていたと言われている。」

地震が多いせいかな昔はよくあったらしいのだけど、祖先様が色々知恵を出し合い

津波が来ても良いように堤防を作ったのである。

かく言う俺達も1日に1回は祖先様と同じように海に潜ってはやっていた。

「それでね地震の影響か地面に見慣れないものが見えたんだ」

「・・・」

「いつもの狩りをしに出かけたらちよつと出っ張っている妙な物が」

「説明聞いても見ないとよくわからねくその場所に行くんだな？」

「こそ、話が分かって助かるく」

そこで釣りをやめてその場所に向かうのだった

何だこれ？

現場に着いて妙な物を二人で、えっちらおっちらと地中から出したが。

人造物のような、それでも無いような、叩いても削ろうとしても歯が立たない・・・

球体の物体。

「ガゼルこれなんだよ！」

「分からないよくって何か書いてある」

「おくどれどれ？」

「・・・」

「・・・」

「読めねえし！」

小さな漁村とは言えとりあえずは自分達の言語は分かる。分かるが・・・

「これは古代文字ってやつ？」

「さあ、知らない文字だから、村長に聞けば何か分かるかもね」
「うっし！これ持って行こう」

狩り場から少しばかり、下に進むと漁村が見えてくる

村長宅

「うーん・・・」

「村長何か分かりますか？」

「他の国の言葉かもしれん」

「他の？」

俺とガゼルは注意深く文字を見る

「そうじゃ、四文字入っているのじゃがイズ○○位しか分からぬ」

「○○って何だろう」

「何せそこだけ削れておるからの」

しかしお前さんがた二人で削ろうとしても手に負えないのに付いてるとはな」

「・・・」

「・・・」

謎の球体は眩いばかりの光を放っている

「まあ分からなくても、こういうのが好きなコレクターが居るはずだから、

行商人が来たら聞いてみるかの」

「・・・」

「・・・」

ヒイロ自宅

「おいガゼルさっきのどう思う」

「あくちよつと変な気がしてきてる」

「俺も確かに二人で削ってたけどさー1時間以上は同じ所削ってたもんな、それでキズが無い」

「そぞ、と言ってもこれ以上分からないしな」

「そうだよなー」

「ま、こうしててもしょうがないし、帰って寝るよ」

「おう、じゃあまた明日な」

「また明日な」

次の日から漁に出たり河川に行き何かいるか見てきたり狩りに行ったりで。

毎日平凡に暮らした。

球体の物体は商人が来て物色してから、また後日来るということで、日にちが経った。

幾日が経ったある日。

「この物体が二十万ゼニーで買い取ってくれるって！」

都会の者が聞いたらそのぐらいか、と思う値段だが

ここは都市から離れているし、物価も安い、月に1万稼げれば凄いと云ったところだ。

俺達は揃って村長宅に行き、様子を見に行った。

村長宅

話し声は分からないが、弾んでいるのは分かるので良い方向で話が進んでいると思う。

村長、商人、コレクターとその付き人らしい人だ。

「ガゼル結局何なのか分からなかったな」

「そだな」

その夜に村上げてのお祝いとし、コレクターと商人を交えてお祭りが行われた。

魚料理や狩りでとった肉料理など色々並ばれてお酒も振る舞われた。

「ヒイロとガゼルよ良いものを拾ってくれた。おかげで村も良くなるだろう」

村長が気分良くなっているので調子を合わせ夜が老けようとしていた。

.....

皆が寝静まった時に俺とガゼルは球体の物体の前に座り

「今日で見納めか」

明日の午後には謎の物体が見れなくなる。

「まあいいんじゃないやねえの何が起こる訳でも無かったわけだしさ」

「ま、そうだな」

冗談で

「ほらあんたも飲みな、イズ呑め」

と名前が彫られている所にお酒を置くと・・・

ボワワワーン！

「はい呼ばれて出てきたイズノメ様だよ！」

しかもいくら寝静まる時間とは言え、外は寒い、
焚き火をしていたはずだ、それが
いきなり火が消えるてことは無いはず、しかもやけに静まり返つて
ると思つたら

俺とガゼル以外には人が見えない。

「ちよつと神威を使わしてもらつたよ、君たちでいう超常現象とも言うけど」

「なるほどね」

いくらか冷静になつてきた。

「私の亜空間に招待です♪」

「流石に驚く事が多くて、なんでもいいよつてなつてきた自分に驚いてる」

「俺もなんか慣れてきた感じだヒイロ」

「そつかもうちよつと驚いて欲しかったけど・・・」

それでね、久しぶりに出れたから頼みがあるんだ」

「？」

「ここは何処だか分からないけど外の世界つて言うの見てみたいの」

「外の世界つて」

なんとなくだが分かつてきた。

「仮に出たとしても支度金や食費等が無いから、出掛けられないよ」

「無一文で出るなんて野垂れ死にしちゃうよ」

「大丈夫♪そこは私がなんとかするから、それと・・・」

「私の寢床をあんなに削ろうとして謝ろうとか責任取ろうか考えもしないのかな？」

「・・・すみませんでした、一緒に外の世界に行くことにします」

翌朝

村長宅

「ヒイロにガゼルよ、お前達のおかげでお金を稼げた、

ホントはお前達の功績じゃきに半分は渡したいが、この村も知つての通り貧しいのだ、だから5万ゼニーを渡しておく、

そして村の外に出るのじゃ、お前達はまだ若い、外に出て村に貢献出来るものや

知らない知識や体験をしてきてもらいたい」

「分かりました村長！」

「村に貢献出来るよう頑張つて行つてきます」

「よいしいぎ旅に出るよ！」

「・・・はて？何故か女性の声が聞こえたような気のせいか」

「村長！昨日久しぶりに騒いだから疲れが出たんですよ！」

「そうですそうです！今日はゆっくりしてください！」

今まで作った干し魚や干し肉、海で取った海ジオや水を持って出掛ける準備に掛かる。

女神イズノメ様と言うと

「寝床持つてかれちやったから困るけどしょうがない、代用ベッド出すね」

チマーつとした。手のひらサイズの滑らかな石

それを皮袋にいれる。

目指すは漁港都市エーゲデンだ。

と思つたら空模様が怪しい

とりあえず準備をして長旅になるので丁度いい休みなのかも。

「ええええええーまだ出掛けられないの！ヤダヤダ！行こうよー！なんでの行こうよ！」

1人だけギャンギャン騒いでたのは、・・・言うまでもないだろう。

第3話

「さーてと、じゃあ出発するか!」

「そーだな行くとするか!」

「やっとう掛けるう・・・」

2人と1柱の女神イズノメ様

2日間、嵐が来たので出るに出られず

やっとう今日出発だ。

「確認するけど、俺達はまず村の近辺しか知らない」

「漁港都市まで大体2日目で着くと村長が言ってた」

「中央都市ギヤリシヤに行こうとするところの村からだ」と、

森林を通り過ぎなきや行けないから迷う可能性は十分にある」

「ので漁港都市に海辺に沿って向かう」

「途中にあるネイロン川にぶつかったら、そこを渡ってすぐ漁港都市に着けるはず」

「了解!」

「はーい!」

「よーし出発だ!」

ザザーンザザーン

海面が光を浴びてキラキラとして輝き、

さざ波がゆつくりと来ては引いて来ては引いてを繰り返している。

昨日まで嵐が来ていたが、

村に被害はこれといって無い、強いて上げるなら村長のカツラが飛んでった位だ。

村の堤防は一定の間隔で石を分けて、重ねて置いてあるので津波の影響を減らしている。

何より、魚が勝手に石と石の間に卵を産んできて来てくれるので自給自足には事欠かさない。

流石に村長のカツラが海に流された時は諦めてもらうしか無いのだが。

その影響もあり、漁港にはなれないという欠点がある村だ。

「おーいヒロ結構歩いたな」

「そうだな」

朝から村から出たので、陽が登ってきている快晴だ

太陽がほぼ真上に差し掛かっている。

「ねーちよつと休憩しようよ」

「・・・」

「ねーつてば」

「・・・・・・」

「ねえーつてばあー！」

「だー分かったって、何処でお昼にするか考えてんの」

「大体イズノメ様って腹減るの？」

「てか神石（しんせき）居るだけで歩いてもないのに疲れたの？」

神石にずっと入ってた、イズノメ様だ。

衣食住で足りないのは食だと思うが、さりとて、いつも食べてるよ
うには見えないし、

あの中に食べ物があるとは到底考えられない。

「意外と疲れるんだよー！寝たりゴロゴロしたり外の景色見たりし
て」

「ヒロその石投げちゃえ！」

「そうっすつか！」

「えええええー！ダメダメー！」

軽く昼食を取り、暗くなる前にイノシシを狩りなんだかんだで
夜になってしまった。

イズノメ様は食べる事は無いので、二人分なら丁度いい。

その夜はテントを張り2人と1柱が寝静まった。

あくる次の日、何も問題なくネイロン川に差し掛かり、そこを越えて漁港都市エーゲデンが見えてきた。

「やっと見えて来たな」

「ああ、イズノメ様見えてきたよ」

「ねー見えてきたね」

「とは言っても身体洗いてえ」

「同感、川で一応洗ったが軽くだもんな」

「よーし！ちよつとスピード上げてくぜ！」

「オー！」

第4話

漁港都市エーゲデン

ここでは各国の色々な魚が集まって来る有数の漁港都市の一つである

うちの村も行商人経由で取引をしている所だ。

俺とガゼルと女神イズノメは宿泊場所を見つけて一段落していた。

「ガゼル着いたは良いけど、この先の事考えて無かった」

「俺もそうだな〜・・・」

「外見に行こうよ〜!」

「・・・まあ考えててもしょうがないか、

イズノメの言う通り外に出て散策ついでに情報集めすつか」

「了解〜」

「やったね〜!」

とは言ったものの田舎者と何も考えて無さそうな女神では、何が何処にあるのか分からず、

商店を見つけて、この都市の案内所を探した。

幾つか分かったことだが、この都市で勝手に釣り狩りをしてはいけない。

やるには許可と一年間はここに居住してなくてはならない。
等、結構と言うか、かなり制約が厳しく、どうしようか?と考えていると

この辺りでなら住み込みで働ける所、と言ってきてもらった。

「ヒイロどうする?」

「どうするってたった2日旅してここで永住ってのはあんまりだ」

「うんうん」

「とりあえず情報は手に入れたから一旦戻るぞ」

「分かった」

ヒイロ宿泊地

色々話し合ったが生活費も基盤も無いので、仕事を探す事にした。

魚市場

「おい新人2人手伝ってくれ。」

「ハイ親方！」

「お前ら筋いいな、どんどん覚えてガッツリ稼ぎな！」

「ガッツリやります！」

ヒイロ宿泊施設

「その新人1人魚さばいてくれ、もう1人は肉を切ってくれ、いつも通りで頼むよ！」

「ハイやつときます！」

朝から魚の搬入の仕事や夕方からの宿泊施設の調理に携わって仕事をしていた。

元々慣れてるから、すんなり仕事に入れて順調に給料を稼いだ。

なんだかんだで、慣れてきた頃に。

「結構慣れたし、お金もある程度稼いだね」

「そうだな」

もう4ヶ月はそうしてただろうか。

朝からの仕事と宿泊施設の宿泊代の代わりに料理等で補い結構貯まっていた。

そして今日もいつもと変わらず仕事場に行こうとしていたら周りがざわついていた。

「おいお前達来てたのか」

「親方どうしたんです」

「稀にくる海龍がずっと沖の方で見掛けたらしいんだよ、そうそう無いんだけどな、

襲われるってことは無いのだが、海龍の生態はまだよくわかってねえんだ。

たまたま襲わないだけなのか、自分のテリトリーじゃないからなの

か。

ただ2人には悪いが仕事の量が減るから、解雇って形になる」
ええええ！

「こういう時もあるから、この解雇証明書を持ってこの都市のギルドに見せなさい」

たくさんは出ないがお給料は出る」

ヒイロ宿泊施設

こちらも海龍騒ぎが起こり同じように解雇証明書を渡され、ギルドに見せに行った。

「ヒイロどうするか…」

手元にあるお金は150万ゼニー

解雇される原因はこの都市に完全に住んでる事ではないのが1番の原因との事。

「だから制限が厳しいんだな」

「どっか行こうよ！イズノメ飽きた」

「お前はなんにもしてないからな飽きるわそりゃ」

「ぶ〜いじわる」

「でもさ、ここに居てもしょうがないし、お金もある程度貯まったから中央都市行かない」

「そうだなー！行くか！けど行く前にギルドに行って中央都市ギヤリシヤの情報聞いてこよう」

「よーし行こうよ〜！」

「おおおー！」

ヒイロ達はギルドに行き、中央都市ギヤリシヤに向かうのだった。

第5話

漁港都市エーゲデンと中央都市ギャリシヤの街道

「おいおいヒイロ！ヤバいぞ！」

「なんでこんな時に！」

「うひゃー！」

トイレに行った御者が戻ってこないと思ったら、言った方角からデカイ、カマキリか？

数時間前に遡る

漁港都市エーゲデンから馬車でギャリシヤに向かうには半日も経たずに着く事が分かった。

「ガゼル準備はいいか」

「ヒイロこっちは準備出来るよ！」

「ヒイロやガゼルいつも私に話振ってくれない」

「・・・」

「あのなイズノメ様そもそも俺達以外には見えても無いし、

喋ってる声さえ届いてないんだぞ

それで人前で喋っててみなよ頭おかしいと思われるって、

石に向かって喋ってるんだから」

「ぶ〜」

「よし行くぞー！」

馬車停留所

・・・えなんだって？

「ごめんな、今回の騒ぎでほとんど出払っちゃってて

、ちよつとスピード落ちるけどこれなら料金も安くしとくよ」

ちよつと・・・まあ、贅沢は言わないけど、馬はちよつと老いてても文句はない

が、御者はなんだ！見るからにやる気無いぞ。

御者は鼻の穴にホジ×3をして出てきた物体を見てニヤニヤしている

・・・もうなんだっていい・・・

「なんでもいいから出発しよう・・・」

そして数時間後トイレに行くと言出し御者は見られるのが嫌だと
言っ

て
森林奥に行ってしまった。

「おいヒイロもう置いて行っちゃおうよ」

「冗談でもそりや無理だろ、お金払ってるし着くまで我慢しとけ」

「ヒマ〜」

「イズノメはいつも暇だろ！」

「ぶ〜」

・・・出てこないな

「長いね」

「だね〜」

ガサガサガサガサ

「お」

ガサ！

「おいおいヒイロ！ヤバいぞ！」

「なんでこんな時に！」

「うひゃー！」

トイレに行った御者が戻ってこないと思ったら、言った方角からゴ
カイ、カマキリか？

「おいヒイロ！来たぞ！」

「分かってる！」

ヒイロは御者台に座り、ガゼルは上半身だけ出して弓を番える。

「イズノメ様他からなにか来ないか周り見といてください」

「おおおやっと思番ね！任せてよ！」

デカイカマキリが2匹

カサカサと、はい寄ってきてガゼルの目の前に1匹が御者の荷物置き場に着地

着地した寸前で顔に矢が突き刺さる。

鎌をデタラメに振り回していたが馬車が動き出した為バランスを崩し荷台から落っこちる。

「横から来たよー！」

馬車が走り出したとはいえ、あまり早くない馬さんち、横から鎌が振り下ろそうとしたが、

ヒイロの釣り竿がカマキリの関節に引っかかり、

攻撃が鈍くなった時にガゼルが狩り用のナイフで腕を切り落とす、

片腕でもがいていたが、矢を番えたガゼルに顔に狙い撃ちされて転げ落ちて行った。

「ふう間一髪だったな」

「確かに、誰か欠けてたらやられてたかもしれないイズノメ様助かったよ」

「えっへん任せてよー！」

これで何事も無く終わってくればいいが

「しかしこんな物騒な事態になるなんて思わなかったな」

「だね、ちよつと現状を変えていかないと、また起きた時に対処出来ないと思う」

「前途多難？」

「かもな」

この後には順調に中央都市ギヤリシヤに進んでいった。

この後、御者と思われる死体が切り刻まれて食い散らした状態で見つかった。

第6話

中央都市ギャリシヤ

都市有数の中でも大きな都市

主に職の斡旋や冒険者の育成をもやっている、中心に街がある為色々な商品を扱っている。

そして色んな人もそれぞれこそ多種多様に。

「ガゼル、イズノメ着いたぜ」

「やつとか今までで1番、道のりが長かった気がする」

「私もそう思うよ」

道中色んな事があったが、ギャリシヤに無事着けたので良かった。

借りた馬車を預かり所に持っていき

(御者が途中居なくなりモンスターに襲われたことを報告)

搜索願いをだして、ギルドに向かっている。

「なあヒーロ着いたは良いけど、これからどうする?」

「そだな、ここなら結構長く住んでも問題無さそうだ。

何よりもここは人が多い分、何かあった時に身元不明とかじゃ探す時に大変だしな。

居住権貰おう」

「お〜ここで住むんだね、色々とありそうだ」

「了解、じゃあここで拠点に活動しよう」

ギルドに居住申請をして住む場所が決まり、今後の話し合いで

「じゃあヒーロは剣術頑張るのか」

「まあな、弓は得意じゃないし、流石に釣竿で戦闘は何かあった時に釣りが出てこない(笑)」

「ガゼルは短剣術と弓術を習うんだな」

「そうだよ、弓だけじゃ対処しきれない時も当然あったし、

かと言って剣じゃ邪魔になっちゃうしね短剣位なら持ち運びも楽だと思うよ」

「イズノメはいつも通り？　そう言えば俺達と会った時に空間を自在に操ったりしてたけど」

「そうだ、あれが出来れば、戦闘が楽な気がする」

「ん〜つとだね、イズノメが住んでる社はすごいちつこいので

神通力が全然貯まらないのだから周りを見るのが精一杯、

見つけてもらった時は大きかったでしょ」

「あくなる程ね」

「じゃあ等身大じゃなくて姿形が小さいのもそうなんだ」

「あれは、そんな仕組みだったんだ。」

「後は働ける所だね〜」

職業安定所

「ここ色々あるな」

「だな」

「エーゲデンとは違い普通の職業やクエスト等が出ている」

配達、料理店、ギルド、家事のお手伝い、服屋、冒険者等等、色々
と募集をしている。

「冒険者なんてあるんだな」

「訓練所があるくらいだから、そう言えばエーゲデンのギルドの人に
聞いたな」

色々あり過ぎて、忘れてた。

「冒険者になるには、ある程度戦う基礎知識と腕を上げて行かないと
資格が貰えないそうだ。」

「まくそうだよな、戦うのは自分とは言え、何も無しに行くと死ん
じやうからね。」

「戦って経験を積んでいくと、色々特典があるんだそうだ。」

「戦ってるだけじゃ無職と変わらないしね。」

「おいおい冒険者の説明をするとして、

「じゃあ慣れてる料理店でも探すか」

「だなく同じ所の方が連絡取れやすいし」

「私は？」

「私はお留守番」

「ええええ！ツマンナイよ〜」

「うーんって言っても姿が見えない喋れないってどうなんだ？」

「・・・なんとかしてみる！」

「出来るんだ!?!」

「出来ないけどやってみる」

「・・・」

「ピイロとりあえず連れていけば？あれこれ言われてても埒あかないし」

「そうだなく、やってみるか」

そして、料理店での面接をパスして、

実技もやらしてもらい、即戦力として雇って貰えたのだった。

第7話

榛葉料理店（はるばりようりてん）

個人経営でさほど忙しくは無い、とは言え夕方頃からはそれなりに人が入ってくるそうだ。

丁度人員募集をしていたので、ここで働かせて貰っている。

「兄ちゃん達が居てくれてホント助かるよ」

「そうだね〜ホント助かる」

ここでは仕事場のマスターとその奥さん

面接もしてくれた人達だ。

共働きだそうで、作れるのはお惣菜や決まった定食、

オカズ等手間があまり掛からない物が多い。

ガゼルとヒイロは料理は手慣れているので、ここではなくても良かったが、

訓練所等に行く時間など、時間を有効に使いたかったのでここに決めた。

ガゼルやヒイロは料理の仕込み、揚げ物や焼き物等を担当し、

マスターと奥さんは主に接客で焼き物等を担当。

お店自体はそこまで大きくない小料理店だ。

お客さんも固定客が多いせいか、これといって問題はなく料理が運ばれて行く。

「なんだマスターと、はるば奥さん2人して接客たく良いアルバイト雇えたんだ」

「そうなんだよく、いきなり厨房任せれるなんて、そうそう居ないから楽できるよ」

「2人入ったんだけど2人とも筋が良いから・・・」

厨房の中

「ガゼル結構俺達あてにされてるんだな」

「だね、漬け込みや焼き物位だけなら俺達でも楽だしね」

「もう私もやくにたってるじゃない〜！」

イズノメ様は今厨房の所には居ないが店はそこまで広くないので
お店の玄関とレジ付近で待機中だ。

少しの距離なら離れられるという事で、マスターに頼んで目立たない所に神石を置かして貰った。

お客さんが店に入ったら即俺達に伝達、

メニューも、マスターや奥さんがオーダー入る前に

相手の会話を聞いたりして既に準備に取り掛かったり、

お客さんと喋っているマスターや奥さんがレジにお客さんがいることに気が付かなくても

イズノメ様が知らせてくれるので、ありがとうございました！と言うと直ぐにマスターか奥さんが

レジに行ってくれる。

今回ばかりはイズノメ様は凄い役に立っていた。

「エツへん！私もやれば出来るでしょ！」

「ああ、凄い役に立ってるぜ！」

姿形は可愛いと言いたいが、いかんせん小さ過ぎるのと他の人から姿が見えないのが欠点か。

等身大で姿が見えてれば看板娘もとい看板女神になれたらだろうけど。

あまりにもスピーディに事が運ぶので次の日の仕込みもすぐに終わった。

時給八百ゼニーだったが、翌日から九百ゼニーに変わり

週4日出ることになった。夕方6時から夜11時まで。

営業時間AM11時〜PM2時 PM5時〜PM12時

第8話

「今日から君達に戦闘の基礎訓練を開始する」

ギヤリシヤ訓練所

色々な種族が集まり様々な職業訓練がある

世界有数の訓練所

俺とガゼルはここに来て各々の訓練に勤しむ。

ガゼル said

「よし次はガゼルか十本連続で矢を放て」

周りには色々な人が試験官の合図と共に矢を番え、

自分の番になるまで待つて模擬試験を受けに来ている。

ここは弓を使う訓練所、的に当たればアカ、外れればシロが主だ。

ドン！

「1本目アカ」

弓を扱う訓練生達が今どのくらいの力量を測るためだ。

ドン！

「2本目アカ」

自分の合った職か、

ドン！

「3本目アカ」

自分がやりたい職か、

ドン！

「4本目アカ」

で分かれるが

ドン！

「5本目アカ」

ここで模擬試験を受けて

ドン！

「6本目アカ」

力量に合った訓練を受けていく

ドン！

「7本目アカ」

と言うシステムだ。

ドン！

「8本目アカ」

ちなみに、授業はチケット制で着たい時に来る。

ドン！

「9本目アカ」

次はラストだ

「10本目アカ！初日で全部当ててくなんて、試験はすぐにも突破出来るな」

何時もと変わらない事やってるしね、

的を当てるだけなら、何時も狩りしてた頃に比べて楽だし。

「ハイ、そのつもりで全部当てていきました」

この後に弓での試験をパスし初日で冒険者の資格を手に入れたガゼルであった。

ガゼルside out

ヒロside

「では3本勝負始め！」

今俺は剣術の模擬試験を受けている。

ホントの剣だと危ないので、木刀である。

相手は試験官の人で、現役を引退か小遣い稼ぎで来てる人もいるという。

「てりゃ！」と横薙ぎをしたら、あっさりと、弾かれて

「1本目勝負あり！」

と胸に木刀が当たり後ろにすっ転んでいく。

胸当てや籠手等しているが、怪我はあまり無いが衝撃が来るので

「ケホケホ・・・」

分かる人は分かるかと思うが、

「大丈夫かい？」

「大丈夫です！」

ってまあ、これまたアツサリと倒されてしまう。

「2本目始め！」

今度こそ！

カンカンバシーン！

「2本目勝負あり！」

・・・とりあえずは数合打ち合ってもらえた。

「まだまだ行けます！」

もう、負けてもなんでもいいや！

「最後3本目勝負！」

左右上から薙ぎ払ったり下ろしたりしながら

カンカンバンカンキンキン！カン！バシーン！

「3本目それまで！」

「・・・」

「良く頑張ったね、また対戦したくなかったらここに来なさいね。」

女の人だったのか、アツサリと流れる様に剣をいなして攻撃をしてくる。

まあ、俺が弱いだけってのもあるけど。

「また来ます！貴女をまた対戦させて貰いたいです！」

「あら、私でいいのですか？」

ここの剣術の訓練では、剣を扱う人が他の訓練所より多い為、指名や推薦がある。

実の所俺は剣術なんてやった事は真似事位だけだったので、まとも
にやった事は無い。

素人の俺と相手の女の人、

後で聞いた話だが、素人と訓練所で雇って貰えた新人は大体はブツ
キングされる。

じゃないと雇って貰えたはいいが、新人では指名や推薦等一切来な
いのだ。

「はい、貴女にします。」

もちろん、他の人について言うのもあるけど、あそこまでボロボロに
されたし（手加減されてなお）

負けたので1回ではい終わりって言うのも味気ない

女の人と言うのもあったけど、え、俺はこう見えても15歳だよガゼルも同じ、

小さい時から色々やってるしさ。

「わかったわ、私の簡単なプロフィール渡しとくね。」

「よっしゃ！次の時もよろしくお願いします！」

「ええ、ふふふ自己紹介しとくわねプロフィールの名刺にも載ってるけど私は御剣 あやか よ」

「俺はヒロと言います御剣さんよろしくお願いします！」

「ええわかったわ、ヒロ君コチラこそよろしくお願いしますね♪」

そして今日も含めボロボロにされる日々を送るのだった。

その頃イズノメ様は

「なーんで、レジに置きっ放しで行っちゃうのかな！」

ヒロとガゼルはこう見えてもお子様だったので、

訓練所とか興味津々でイズノメ様の事はキレイさっぱり忘れていたのだった。

第9話

ズボ!

オークの胸から手が生えた!

ブギゆるるる・・・

胸から赤色の液体がぽたぽたと際限なく流れ出している。

いきなりの事だったのか無防備な状態で、胸を貫かれて痙攣をし、倒れる。

その後ろには・・・

アイーダの店

カランカラン

「いらっしやい」

さほど大きくはないお店だがチラホラ客は居るので潰れるということは無さそうだ。

入って来た人間はそれとなく、空いている席へと向かった。

しかし周りの反応はギラついて、その男へと視線が行く。

「おい、あんた血だらけの手で店に入ってくるんじゃないやねえよ。」

酔っている1人の中年冒険者がその男に近付いた。

「おい!聞いているのか兄ちゃんよお!」

と、手を挙げた拍子に、ドオオン!

とそのままの状態で、地面に叩き付けられていた。

「・・・」

その腕を見ると鍛え抜かれたと言ってもいいほどの逞しさが伺える

が、冒険者であれば皆それなりに腕っ節は強い、鍛え抜かれたと言えでもそうそう

負けることは無いはずだが。

「・・・」

叩き付けられていた中年冒険者は気絶をし、腕が折れているが命には別状危険はなさそうだ、

叩き付けた本人は興味が無さそうに血を落としに行った。

「……この……自・慢の料理を……」

周りが静かになり、1人の男だけが席に座っている。

他にも冒険者は居たが、あまりの出来事にその店から出て行った。血の気が多い彼等でも、関わりたくない為、出て行ったのだ。

1番被害にあったのはお店だが、下手してなにか言おうもんなら、とぼつちりが来るとも限らないので、言われた通り注文を受けていた。

カチャカチャと男が食べている音だけが響き、喧騒も会話すら無く、時間は経っていく。

しばらくして、かなりの量を食べてから会計に進み男は店から出て行った。

「……なんだあのお客さんは、あまり見掛けないが……」

「私もあんな人見たことない。」

店主とウエイトレスは真つ青な顔のまま出て行った男の方に顔を向けて、少し経ってから

片付けに入った。

多分今日はもう誰も来ないだろうと思って次の日の仕込みをしようとしていたら

出て行った冒険者達が戻って来て何時もの賑わいに戻っていった。

怪我をした男は直ぐに治すように皆で考えたが、日が暮れた為明日の朝に

治療を余儀なくされた。

「くっそ、痛てえ……なんなんだ一体……」

？

グオオオ！ウオオオ！

ブギゆるるブギゆるる！

夜中冒険者でも彷徨くことはほとんど居ない中で、男？は1人で歩いて行く。

翌日の朝治療をしようとする為に移動する集団が現れたが、

道中死屍累々のモンスター達が転がっていたという。

第10話

3ヶ月後

ヒイロは晴れて、資格を取得し冒険に出る準備に取り掛かりながら仕事をしていたある日。

「はあーい！」

この声は！

「御剣先生！」

「また食べに来たわよ♪」

訓練所に通い出してから御剣先生は頻繁にお店に通ってもらっている。

常連客と言えないくない頻度に来てもらってるせいでもあるが、何かとオマケを付けていたりするのだ。

そのせいかかどうか分からないが、訓練所以外でも基礎訓練を付けてもらったたりしたお陰で、

これでも早いペースで冒険者資格を取れたのだ。

「ヒイロ君達は冒険者として出かける予定あるんだよね」

「はい！来週から出かける予定ですよ」

俺って結構言葉遣い直された・・・

「ふーん、私もそろそろクエストをやるうかと思って一緒に行くてる」

仲間集めようかと思ってたんだけど、どう？一緒にやらない」

「ええ！ホントですか?!」

「ええホントよ。まだ色々と教えないといけないし、と言っても私も駆け出しに近いから

力が近い人の方がいいのよね。んで相談なんだけど私もパーティに入れて3人だよな。」

「そうですね、俺とガゼルと先生で3人です。」

「うん、それでね、もう1人パーティにいれたいんだよ、ちよつとした冒険してみないかな」

そう言った御剣先生はおもむろに、地図を取り出して

「この場所なんだけど、野草を取ってくるクエストを受けたんだ」
確かこの場所は野草が他よりも豊富にあるらしいとは聞いた。

俺が知っている事だと、何もそこまで行かなくても、色々と取れる場所はいくらでもある。

いわゆる、初心者向けと言ってもいいだろう。

ただ御剣先生が指したのは

「そう、この場所は豊富に取れる分、地質が良いから、他のモンスターが来る確率が高いんだよ、

言い方変えると野草の品質が高いから栄養分多いしね。それを食べるモンスターが狙ってくるって事」

クエストによっては、品質等で報酬が変わってくる。

「分かりました、じゃあ待ち合わせはいつごろですか」

「それはね・・・」

「はあー」

御剣先生が危なく無くマンティスに攻撃を仕掛ける！

マンティスが振り下ろした前脚を切断、

「おりゃー」続いてヒイロがショートソードで胴体を切る

絶命

ガゼルが弓矢でイノブータンに遠距離攻撃！

矢がイノブータンの横っ腹に突き刺さった！

「ブヒーヒーン！」

のたうち回るが、誰が攻撃したか分かると、唸りを上げて突っ込ん
で来る！

「ちー」

ガゼルはもう1度矢をつがえ直し、撃とうと構え直したが、間に合
わないと思いい横に避ける！

ギリギリで避けた！

が急に体勢を崩した為か動きが取れないまま転ぶ、

イノブータンも勢い余って転んだがスグにガゼルに向かって走り
出す！

ダダダ！

「エイ！」

と横から何かが出てきた！

今度はイノブータンの前足に短剣が刺さり、そのままの勢いで走っているイノブータンは急に止まれず

前足に刺さった短剣が前足を切断しながら後ろ脚まで傷が出来た。

「危なかった、助かったよメイラさん」

黒頭巾に黒装束の女性に言う

「いえいえ、なかなかタイミングが難しく遅くなっちゃったよ」

右目が銀で左目が金なんだが他はマスクをしているせいか、他は分からない。

身長は165位「スリーサイズ83, 57, 81」

だと感で思う。

「この変態めえ！」

凄いい剣幕でメイラさんがにじり寄ってくる

「えええ！なんで！」

「声がしっかり出てるよ！」

な！心の声か！

先刻

ギルドよりも少し離れた居酒屋

ぎい

「いらつしやいませ〜何名様ですか？」

店内から可愛いらしいエルフの店員さんがパタパタと小走りです寄ってくる

「えつとここで待ち合わせで・・・」

「おーいヒロこつちだよ」

とちよい奥まった所から、御剣先生の声かして来たので

「あ、あそこです」

「かしこまりました御用のある時はお呼びくださいね♪」

とニツコリと微笑んでくれたので、デレてしまった！

「こらヒイロ私の時はデレ無いのにあんな女にデレるとは〜！」

と半透明化したイズノメ様が怒ってきた。

女神様でいつも石の中で寝たり起きてきてもアストラル体の状態なので、叩かれても蹴られても

何も痛くはない。

すべて素通りの攻撃を繰り返すイズノメ様をほっぽいといて、俺とガゼルは

御剣先生の待つ部屋についた。

「おっ！来たきた」

もう飲んでいるのか、先生は出来上がっていて

「おいヒイロとガゼルはよう、すわれ〜でなごちらはメイラちゃん可愛いでしょ〜」

あ〜うん可愛いと思います…がまだ座ってもねえ

「確かに可愛いですね！」

「お、おう可愛い子だね！」

俺とガゼルはほぼ同時に答えた…先生の目がメチャすわつとる…

可愛いと言うが目元しか分からんし、既に食べ終わってるのかクチは布で覆われている

出で立ちがほとんど黒で埋まっついて夜出歩かれたら誰かも分からない。

いあ、その前にみんなが集まってから注文すべきだったのは

と、思っいても言えないヒイロ達だった